

「継続する企業メセナ～沖縄の伝統芸能を巡って」

2019 年度メセナ・アソシエイト

照屋 真弓

【目次】

1. 要旨
2. 研究の目的・背景
3. 研究の方法・インタビュー実施概要
4. 調査
  - 4-1. 沖縄の伝統芸能について
  - 4-2. 新聞社 2 社の事業
  - 4-3 沖縄タイムス社「沖縄タイムス伝統芸能選考会・選抜芸能祭」
    - 4-3-1. 事業の概要と経緯
    - 4-3-2. 事業の運営
  - 4-4. 琉球新報社「琉球古典芸能コンクール・芸能祭」
    - 4-4-1. 事業の概要と経緯
    - 4-4-2. 事業の運営
5. 考察
  - 5-1. 継続の要因
  - 5-2. 課題
6. 課題解決に向けた調査
  - 6-1. 横浜能楽堂「琉球芸能事業」
    - 6-1-1. 事業の経緯と概要
    - 6-1-2. 事業の運営
  - 6-2. 考察 評価と人気の理由
7. 本調査から得られた結論

## 1. 要旨

文化・芸術振興には、長期的な取り組みが必要とされるが、実際には短期間で成果が求められることが少なくない。しかし、企業メセナの中には、長期的に取り組んでいる事例がいくつもある。本レポートでは、事業の長期的継続の要因を明らかにするため、沖縄の地方紙 2 社が沖縄の伝統芸能についてそれぞれ取り組む、沖縄タイムス社主催「沖縄タイムス社伝統芸能選考会・選抜芸能祭」と、琉球新報社主催「琉球古典芸能コンクール・芸能祭」を事例として取り上げる。両社の取り組みを通して見えてきた事業継続の要因は、①共感を得る事業目的、②ステークホルダーとのパートナーシップの構築、③長期的に携わる専門家・担当者の存在だった。

近年は参加者数の減少傾向という新たな課題も見られたため、琉球芸能事業のプロデュース公演を行う横浜能楽堂の事例を調査したところ、人気の理由が鑑賞者の目線に立った公演制作や、他にはない伝統芸能の再創造による稀少性にあることがわかった。

これまで演じ手の技芸を中心として発展してきた沖縄の伝統芸能だが、今後は魅力をわかりやすく提示することや、継承の再創造に取り組むといった部分に新たな展開が期待できるのではないかと考える。

## 2. 研究の目的・背景

文化振興においては「50 年先、100 年先を見据えた文化創造の視点が必要」<sup>1</sup>といわれて久しい。しかし、継続こそが役割とされてきた公的セクターにおいて、それを見出すことは未だ難しい。一方、景気に左右されやすく長期的な取り組みが難しいと思われた企業メセナには、すでに 50 年以上継続している取り組みが存在している。公益社団法人企業メセナ協議会が実施している、優れたメセナ活動を顕彰する「メセナアワード」<sup>2</sup>を受賞した取り組みの中から事例を取り出してみただけでも表 1 のように 20 件以上が継続中である。

企業が取り組む社会貢献については、文化以外に環境や福祉といった多くの選択肢があり、文化はどちらかというと価値観の偏りが指摘されやすい分野である。そのリスクを抱えながらも取り組みを続けるには、相応の理由やそれを可能にする手法があるのではないかと考える。

本レポートではこのような意識のもと、継続する企業メセナについて、長期的視野に立った文化振興策の先行事例として取り上げ、継続が可能になるための要因についてさぐる。

---

<sup>1</sup> 公益社団法人企業メセナ協議会「日本の芸術文振興について、10 の提言」2007 年 6 月

<sup>2</sup> <https://www.mecenat.or.jp/ja/award/>

表 1 50年以上継続するメセナアワードを受賞した取り組み

|    | メセナ<br>アワード<br>受賞年 | 組織名             | 取り組み                                                | 開始年  | 継続年数<br>(2020年現在) |
|----|--------------------|-----------------|-----------------------------------------------------|------|-------------------|
| 1  | 2017               | 株式会社沖縄タイムス社     | 沖縄タイムス伝統芸能選考会・選抜芸能祭                                 | 1967 | 53                |
| 2  | 2016               | 昭和シェル石油株式会社     | シェル美術賞                                              | 1956 | 64                |
| 3  | 2016               | 株式会社 CBC テレビ    | CBC クラブ文化賞(くちなし章)                                   | 1960 | 60                |
| 4  | 2016               | 竹中工務店           | 季刊誌[approach]の発行                                    | 1964 | 56                |
| 5  | 2016               | 東燃ゼネラルグループ      | 東燃ゼネラル児童文化賞                                         | 1966 | 54                |
| 6  | 2014               | 株式会社資生堂         | 「椿会」の開催と資生堂ギャラリー、資生堂アートハウスの活動                       | 1919 | 101               |
| 7  | 2013               | 岩波不動産株式会社       | エキブ・ド・シネマー埋もれた名作映画の発掘・上映                            | 1968 | 52                |
| 8  | 2012               | 株式会社千葉銀行        | ちばぎんフィルムライブラリー                                      | 1963 | 57                |
| 9  | 2011               | 六花亭製菓株式会社       | 50年にわたる月刊児童詩誌『サイロ』の発行                               | 1960 | 60                |
| 10 | 2010               | 公益財団法人山種美術財団    | 山種美術館の運営                                            | 1966 | 54                |
| 11 | 2008               | サントリー株式会社       | サントリー美術館の運営と活動                                      | 1961 | 59                |
| 12 | 2007               | 株式会社資生堂         | 資生堂ギャラリーの運営                                         | 1919 | 101               |
| 13 | 2007               | 北野建設株式会社        | 信州に根ざした「北野美術館」および「北野文芸座」等の芸術文化活動                    | 1968 | 52                |
| 14 | 2006               | 公益財団法人サントリー音楽財団 | クラシック音楽・現代音楽の普及・振興                                  | 1969 | 51                |
| 15 | 2005               | 株式会社三越          | 日本橋三越本店を中心とした芸術・文化事業の展開                             | 1914 | 106               |
| 16 | 1996               | 株式会社毎日新聞社       | 「第84回日本音楽コンクール」(主催 毎日新聞社・日本放送協会)の開催と長年にわたる同コンクールの運営 | 1932 | 88                |
| 17 | 1994               | 公益財団法人日航財団      | 世界こどもハイク(俳句)コンテストの運営                                | 1964 | 56                |
| 18 | 1994               | 株式会社あさば旅館酒翠閣    | 「修善寺芸術紀行」の実施                                        | 1965 | 55                |
| 19 | 1993               | 日本生命保険相互会社      | 30年にわたるニッセイ名作劇場の協賛と日生劇場の運営                          | 1963 | 57                |
| 20 | 1993               | 株式会社南日本放送       | MBCユースオーケストラの運営                                     | 1964 | 56                |
| 21 | 1993               | 株式会社紀伊國屋書店      | 紀伊國屋ホールでの運営                                         | 1964 | 56                |

公益社団法人 企業メセナ協議会ホームページより筆者作成 <https://www.mecenat.or.jp>

### 3. 研究の方法・インタビュー実施概要

継続する企業メセナの要因を探るため、実際に 50 年以上の継続が見られる事例を調査対象とすることにした。また、比較する中から共通点を見出しやすくするため、同地域、同業種、同分野を対象にメセナに取り組む次の 2 事業を選定した。

- 沖縄タイムス社「沖縄タイムス伝統芸能選考会・選抜芸能祭」(2017 年メセナアワード受賞)
- 株式会社琉球新報社「琉球古典芸能コンクール・芸能祭」(2019 年 This is MECENAT 認定)

さらに、それらのメセナを広い視野で捉え考察するため、沖縄県外の公共文化施設が取り組む沖縄の伝統芸能事業について取材しようと考え、「古典芸能の継承と再創造」を掲げる次の施設の事業について取り上げることにした。

- 横浜能楽堂が取り組む琉球芸能事業

(2015 年文化庁芸術祭大賞受賞:「琉球舞踊 古典女七踊」企画・制作に対して)

以上の 3 事例の調査と担当者へのインタビューから、長期的視野に立った文化振興事業の継続の要因と、新たに見えた課題に対する解決策を示したい。インタビュー実施概要は以下の通りである。

■沖縄タイムス社「沖縄タイムス伝統芸能選考会・選抜芸能祭」

2020 年 3 月 5 日

株式会社沖縄タイムス社 読者局文化事業本部 副部長 豊島達博氏

株式会社沖縄タイムス社 読者局文化事業本部 村井規儀氏(2020 年 4 月 1 日～)

■琉球新報社「琉球古典芸能コンクール・芸能祭」

2020 年 3 月 4 日

株式会社琉球新報社 読者事業局文化事業推進部 部長 仲原崇夫氏

株式会社琉球新報社 読者事業局文化事業推進部 内間安希氏

■横浜能楽堂が取り組む琉球芸能事業

2019 年 12 月 18 日

横浜能楽堂 芸術監督 中村雅之氏

## 4. 調査

### 4-1. 沖縄の伝統芸能について

#### ・親しまれる沖縄の伝統芸能

沖縄では芸能が生活に根づいており、鑑賞するというより自分でするものという感覚が強いといわれている。街には「琉舞(琉球舞踊)道場」などと書かれた教室の看板があちらこちらに掲げられ、冠婚葬祭では三線を弾き、舞踊を披露する人も多い。<sup>3</sup>子どもは放課後の習い事として道場に通り、大人は仕事終わりの週末にカルチャースクールに通うように道場に通う。

「2016 沖縄県民意識調査報告書」<sup>4</sup>によると、「沖縄の文化・芸能を誇りに思いますか」という質問に、95.6%の人が「とても誇りに思う」「まあ誇りに思う」と回答している。2001 年の調査が 91.7%、2006 年が 94.3%、2011 年が 94.1%であり、過去 4 回の調査全てで 9 割超の人が沖縄の文化・芸能を誇りに思っている。

沖縄の伝統芸能は、次のように整理されている。<sup>5</sup>

- ①研究所や道場で、流派ごとの「芸道」として
- ②青年会など地域に根ざした活動や公民館などを拠点とした「村遊び」として
- ③学校での教育活動(授業、行事、クラブ活動)の一環として
- ④大学での専門教育の一環として(沖縄県立芸術大学「琉球芸能」専攻)
- ⑤「国立劇場おきなわ」の伝承者養成事業として
- ⑥習い事の「教室」やカルチャーセンターの「講座」として

---

<sup>3</sup> 中村(2009)p.142

<sup>4</sup> 琉球新報社編(2017)p.28

<sup>5</sup> 渡邊(2008)p.68 をもとに筆者加筆

⑦その他(例えば、プロの芸能集団の稽古など)

本レポートで取り上げる選考会やコンクールは主に①の「芸道」の層を対象に発展してきた。

## ・琉球舞踊と音楽

沖縄の伝統芸能の中で、本レポートの事例として取り上げる選考会・コンクールで現在審査の対象となっている分野は琉球舞踊と音楽である。

琉球舞踊については、舞踊劇形式の「組踊(くみおどり)」<sup>6</sup>と、「端踊(はおどり)」とに大別することができるが、純粋な舞踊である「端踊」は次の3つに分けられる。

①琉球王朝の「式楽(しきがく)」(儀式用の音楽)として士族たちによって演じられていた曲が「古典舞踊」

②明治維新で王朝が崩壊した後に、「楽童子(がくどうじ)」と呼ばれた士族と芸人たちの共同作業の結果、那覇の街の芝居小屋で生まれた大衆的な「雑踊(ぞうおどり)」

③昭和初期以降、芸術という意識が生まれる中で生まれたのが「創作舞踊」

音楽については、14～15世紀に中国から入ってきた三弦を改良して作られた三線(さんしん)を中心に、箏や笛、胡弓、太鼓を加えて展開されてきた。三線の奏者は、弾きながらうたうため、「歌三線」ともいわれる。刀を差さなかった琉球王朝の士族たちにとって、三線は刀にも匹敵する存在で、床の間に飾っていたほどという。箏は日本のものと同じ、笛は6つの指穴がある中国の「明笛(みんてき)」と同じ構造で、胡弓は中国から入った時は3絃だったが、4絃に改良された。太鼓については能と同様の締め太鼓で、和太鼓を組み合わせることもある。<sup>7</sup>

## ・首里・那覇周辺における伝統芸能の経緯

沖縄では諸島も含め、地域ごとに多種多様な伝統芸能が育まれてきており、その経緯や関係性は様々である。そのためここでは事例となる選考会・コンクールに関わりの深い琉球王朝時代に首都とされた首里と、貿易の中心地として栄えた那覇周辺の伝統芸能の経緯について触れる。

沖縄は、琉球王国の時代、国王が代わるたびに中国皇帝から琉球王に任ずる辞令「冊封」(さつぽう)が出されることで、中国との交易を認められていた。その使者の滞在中、首里城を中心に接待のための宴がいくども開かれた。その中で、村々の祭祀の中で受け継がれてきた民俗舞踊を基礎としながらも、宮廷らしいはなやかな舞踊が生み出されていき、それを取り仕切る役職「躍奉行(おどりぶぎょう)」も置かれていた。<sup>8</sup>

このように独自の文化を作り上げていた琉球王国だが、明治維新の「琉球処分」(1872年)によって消滅し、沖縄の伝統芸能の場は商業演劇である芝居小屋に移った。そこで新しい芝居

<sup>6</sup> せりふ、音楽、所作、舞踊によって構成される歌舞劇。踊奉行であった玉城朝薫(1684～1734)が創作し、1719年、尚敬王の冊封儀礼の際に初演された。

<sup>7</sup> 中村(2009)p.142、p.150、横浜能楽堂 中村氏インタビューより

<sup>8</sup> 中村(2009)p.144

や舞踊がつくられながら、古典舞踊や組踊等の宮廷芸能も継承されていった。<sup>9</sup>

その後、沖縄の伝統芸能が盛んになるきっかけの一つといわれているのが、1940 年の「沖縄方言論争」である。沖縄県学務課による標準語励行を推進する動きと、それに反対する論争が新聞・雑誌を中心に約 1 年続いたことを指すもので、沖縄の近代化と伝統文化の対立として捉えられた。このとき、民藝運動の中心人物であった柳宗悦らが、沖縄の芸能や民具、紅型、陶器といった伝統文化の価値について主張したことで、沖縄の伝統芸能も注目され盛んになったといわれている。この論争時に琉球新報は「芸能は大事だ、方言を捨ててはいけない」と掲載していた<sup>10</sup>とのことで、新聞社の地域文化に対する考えが現れている。

しかし、その盛り上がりも 1941 年～1945 年の太平洋戦争の沖縄地上戦で多くの踊り手や奏者、楽器・衣装をはじめ劇場・舞台を失ったため途絶える。戦後の 1945 年～1972 年の 27 年間、沖縄はアメリカ統治下となった。戦後間もない頃、わずかに生き残った芸能家が集められ、官営の巡回慰問団ができたのが戦後初の芸能の復活だが、それも数年で解散となった。本格的な復活については、1947 年、首里文化連盟(会長は沖縄タイムス社創始者の一人である豊平良顕)などがあったが、伝統芸能界は統一感がなく混沌とした状況だったといわれている。<sup>11</sup>

1954 年に沖縄タイムス社が第 1 回「沖縄タイムス新人芸能祭」を創設し芸能の振興をはじめ、1966 年には琉球新報社が自社ビルにホールを設置するのと同時に「琉球古典芸能コンクール」を発足させた。

日本に復帰した 1972 年、組踊が国の重要無形文化財に指定され、2004 年には、研修制度がある国立劇場おきなわが開館するとともに、沖縄県立芸術大学の音楽学部音楽学科邦楽専攻が琉球芸能専攻に改称、音楽芸術研究科舞台芸術専攻邦楽専修が琉球古典音楽専修に、楽劇専修が琉球舞踊組踊専修にそれぞれ改称された。組踊は、2010 年にはユネスコ無形文化遺産に登録、2019 年には組踊上演 300 周年として様々な周年記念事業が実施された。

## ・沖縄タイムス社と琉球新報社の取り組み

沖縄県では全国紙の購読が非常に少なく、沖縄タイムスと琉球新報でシェアをほぼ二分している。その両社が早くから沖縄の伝統芸能の振興について、牽引役とも言える役割を果たしてきた。全国でもこれだけ伝統芸能について取り組む新聞社はなく<sup>12</sup>、2 社のような継承活動を側面から支援するような長い民間の取り組みがあることは重要とされている<sup>13</sup>。

戦前は、遊び人や不良がすることとさえいわれていた芸能が、現在では地域の誇りや自信の象徴となり、地域アイデンティティの一つとなっているのは、戦後の米軍統治下の時代から、

---

<sup>9</sup> 渡邊(2008)p.65、p.66

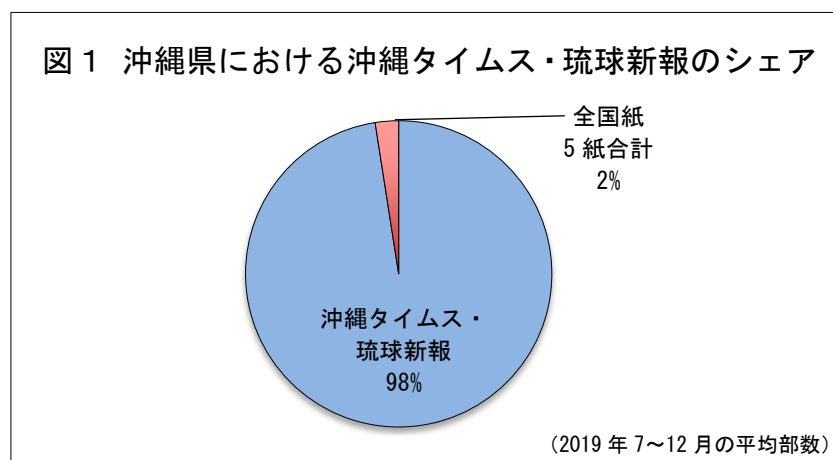
<sup>10</sup> 琉球新報社事業局編(1996)p.69

<sup>11</sup> 沖縄タイムス社編(2018)p.277

<sup>12</sup> 横浜能楽堂 中村館長インタビュー

<sup>13</sup> 渡邊(2008)p.68

人々の心の拠り所を地域の伝統芸能に見出し、先頭に立って盛り立ててきた沖縄タイムス社、琉球新報社の功績に他ならない。



全国紙 5 紙は日本 ABC 協会 (2020) より、  
沖縄タイムス・琉球新報は個別取材により筆者作成

#### 4-2. 新聞社 2 社の事業

2 社の事業は、一つの流れの中で始まったため表 2 のように共通点多い。開催の目的についても、伝統芸能の正しい継承と発展、次の世代の育成のために裾野を広げ、新しい芸能家の登竜門としての役割を果たすことということで共通している。

しかし、違いが見られる点もあり、そこに各社の事業への考え方の違いが表れている。例えば、賞について沖縄タイムス社には「グランプリ」があるが、琉球新報社にはない。これは、沖縄タイムス社が、より良い技芸に賞を与える機会をつくることによって、質を高めていこうと始めたのに対し、琉球新報社はコンクールを芸道のための登竜門と位置付け、「最高部門」をクリアすることが芸能家としてのスタートになるという考え方の違いに由来している。コンクールについてはさらに上の賞の設置を求める声が度々上がるそうだが、現在の 3 部門を維持している。

また、受験資格について、沖縄タイムス社が各賞受賞後 2 年以上の経過後としているが、琉球新報社は 3 年以上としている。これは、沖縄タイムス社が集中的なレベルアップと芸能家として早期自立を促しているのに対し、琉球新報社は芸道として芸を磨くためには必要な期間として考えているという違いがある。

これらの共通点や相違点の中から事業継続の要因をさぐるため、各社事業の概要・経緯についてたどっていく。

表 2 2 社事業の概要の比較

| 名称                          | 沖縄タイムス<br>伝統芸能選考会                                                   | 琉球古典芸能<br>コンクール                                   |
|-----------------------------|---------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------|
| 主催者                         | 沖縄タイムス社                                                             | 琉球新報社                                             |
| 開始年                         | 1954 年                                                              | 1966 年                                            |
| 分野                          | (6 部門) 舞踊・三線・箏曲・太鼓・笛・胡弓                                             |                                                   |
| 賞                           | 「新人賞」「優秀賞」「最高賞」<br>「グランプリ」                                          | 「新人部門」「優秀部門」「最高部門」                                |
| 応募・受験料<br>(事業収入)            | 新人賞                                                                 | 10,000 円                                          |
|                             | 優秀賞                                                                 | 12,000 円                                          |
|                             | 最高賞                                                                 | 15,000 円                                          |
|                             | グランプリ                                                               | 30,000 円                                          |
| 受験資格                        | 「新人賞」は、中学 2 年生以上。各賞を<br>段階的に受賞後 2 年以上を経過後                           | 「新人賞」は、14 歳以上・3 年以上の芸歴。<br>各賞を段階的に 3 年以上を経過後      |
|                             | 沖縄芸能協会(社内に事務局)・沖縄新<br>進芸能家協会に所属する師匠が推薦<br>する者、および主催者が特に適当と認<br>めた者。 | 師匠の推薦と沖縄芸能連盟(社内に事務<br>局)に加盟登録済であること。主催者が認<br>めた者。 |
| 選考委員<br>審査員                 | 主催者が専門家に委嘱                                                          |                                                   |
| 2019 年度<br>応募・受験数<br>(ピーク時) | 547 人<br>(1994 年度:1,094 人)                                          | 720 人<br>(1997 年度:2,010 人)                        |
| 会場<br>(各自社ビル)               | タイムスホール                                                             | 琉球新報ホール                                           |
| 入賞後の<br>出演公演                | 沖縄タイムス選抜芸能祭                                                         | 琉球古典芸能祭                                           |
| 関連事業                        | こども芸能祭                                                              | こども舞踊大会<br>若衆芸術祭                                  |

「2020 年度沖縄タイムス伝統芸能選考会応募要項」「第 55 回琉球古典芸能コンクール 2020 年度実施要項」と取材をもとに筆者作成

#### 4-3. 沖縄タイムス社「沖縄タイムス伝統芸能選考会・選抜芸能祭」

「沖縄タイムス伝統芸能選考会・選抜芸能祭」(以下、選考会)は、沖縄タイムス社(以下、タイムス社)が主催する文化事業である。

タイムス社は 1948 年、戦後、県内初の民営新聞として創刊された地方紙である。紙面の枠には「文化・芸能」面があり、日常的に沖縄の伝統芸能について掲載されている。



事業名: 沖縄タイムス伝統芸能選考会・選抜芸能祭

主 催: 沖縄タイムス社

協 賛: 沖縄芸能協会<sup>14</sup>・沖縄新進芸能家協会<sup>15</sup>

所在地: 〒900-8678 沖縄県那覇市久茂地 2 丁目 2 番 2 号

開始年: 1954 年(現在の名称になったのは 2008 年)

選考会応募者数: 547 人(2019 年度)

趣旨: 伝統芸能の正しい継承とそれを受け継ぐ新しい世代育成を図ることなどを目的に毎年実施。新人芸能家の登竜門として戦後一早くスタートし、沖縄タイムス社が始めた戦後の文化復興運動であり、郷土の芸術文化の向上・発展を図るために設けられた。

#### 4-3-1. 事業の概要と経緯

タイムス社は、創刊者の一人である豊平良顕氏が「戦後の復興は文化から」の信念のもと、いち早く沖縄の伝統芸能について取り組みを始めた。同社の伝統芸能事業の取り組みを追うと、先駆的であるがゆえに様々な変遷が見られる。

選考会の前身となる「沖縄タイムス新人芸能祭」は、1954 年に開始された。その後、1960 年には「沖縄タイムス芸術祭」、1967 年には「沖縄タイムス芸術選賞新人部門」と名称を改めながら、その一環として選考会が実施されてきた。現在の名称になったのは 2008 年からである。

1954 年に行われた第 1 回「沖縄タイムス新人芸能祭」は琉球舞踊を中心に始まり、「美術・工芸運動と並んで郷土の古典伝承という理想を追求した」<sup>16</sup>とされる。当時は舞踊研究所を主宰する師匠がそれぞれ新人舞踊家を推薦し、審査委員によって琉球舞踊ベスト・テンを選定するというものだった。<sup>17</sup>第 2 回は、沖縄美術展覧会と併せて開催し、第 3 回は「応募規則」「審査の基準」踊りの「型」「歌詞」「コスチューム」などの研究会が開かれ、それまでの「舞踊ベストテン」を選抜する方式を「舞踊新人賞」に改め、「舞踊新人最優秀賞」と「音楽ベストテン」を新設した。第 5 回はそこに「創作舞踊」を加え、第 6 回からは、「演劇」「民俗舞踊」「創作音楽」「創作舞踊」「組踊」と分野を広げている。このように、当初は琉球舞踊を中心に始められたが、事業として演劇や音楽や舞踊の創作といったあらゆる芸能を含み、地域の総合的な芸能事業として存在しており、様々な面で工夫・変化が見られる。

関連団体の動きとしては、1955 年には、豊平氏を会長とする沖縄文化協会主催の芸術祭参加沖縄芸能団が、東京で行われた第 10 回文部省芸術祭に参加し「芸術祭文部大臣奨励賞」を受け、同協会がタイムス社の新人芸能祭と連動し、舞踊の型の研究にも着手し始めた。

<sup>14</sup> 1967 年発足の沖縄の伝統芸能を組織的に発展させる目的の団体。現在、約 40 の音楽団体、流派が所属している。

<sup>15</sup> 1966 年創立の選考会の受賞者を会員とする団体

<sup>16</sup> 沖縄タイムス社編(2018)p.277

<sup>17</sup> 芸術祭運営委員会(1963)p.205

1960 年からは「沖縄タイムス芸術祭」と名称を変え、総合的な芸術文化の向上を目指してスタートされた。入選・受賞演目は、タイムスホールで一般公開された。その後、琉球舞踊研究会を設けて型の統一をはかり、他方、民俗芸能試演会を開き、地域に埋もれていた芸能にもスポットを当てた。また、日舞との合作や組踊の名作の上演などが行われるなど活発に新しい動きがあった。

一部、芸能家との方向性の違いから 1965 年に休止するが、1966 年からは「沖縄タイムス芸術選賞」として再スタートされた。同芸術選賞は、その年にできた作品や芸術文化活動を選考委員会で選出し賞を贈る仕組みで、対象は、古典舞踊、古典音楽、組踊、美術・工芸、演劇、音楽（洋楽、邦楽）、創作舞踊、民俗芸能、文学、芸術文化関係の出版物など多様だった。そしてその翌年である 1967 年に現在の選考会の元となる「芸術選賞新人部門」が開始された。1983 年には新たに「芸術選賞グランプリ」が設けられ、2017 年度までに 477 人のグランプリ受賞者が誕生しており、近年では学生のグランプリ受賞者も出てきた。



選抜芸能祭で舞踊「伊野波節」を踊る優秀賞受賞者たち  
2019 年 10 月 6 日 沖縄タイムスホール  
沖縄タイムス社提供

1990 年代半ばからは、応募者の負担軽減や質的向上に向けて様々な変化があり、審査員の活性化や、応募者の負担軽減のために、目前で地謡の生演奏を準備する方式から録音テープによる審査へと移行した。

2012 年には創刊 65 周年とタイムスホールのこけら落とし公演を兼ねた芸術選賞歴代受賞者公演や「万国津梁の音色ー三線と三絃・三味線」公演、沖縄伝統組踊「子の会」の組踊などを上演し、2014 年には、宮古島で特別公演を実施し技芸の継承から地域交流へと発展している。

このように経緯をたどってみると、タイムス社が当初、創刊者の一人であった豊平氏という文化人を中心に、沖縄の伝統芸能の振興について必要性を感じ、先頭を切って試行錯誤しながら取り組んできた姿が見えてくる。特に初期は、伝統の継承にとどまらず、「創作」を積極的に促しており、多様な芸能・舞台芸術と組み合わせる試みも活発で、芸能を新しく創造することで継承しようとする姿勢が見られる。

#### 4-3-2. 事業の運営

事業費については、そのほとんどを選考会の参加費収入、選抜芸能祭についてはチケット収入によって運営している。それを支える参加者数の確保については、関連事業として、選考

会の運営パートナーでもある沖縄芸能協会に所属する舞踊団体の幼稚園児から中学 1 年生までを対象とした「こども芸能祭」(2019 年で第 39 回となる)との連動を図り、子どもの頃から伝統芸能に接する機会をつくることで将来の選考会参加者の確保につなげている。また、日頃から選考会受賞者のその後の活躍について、受賞や独演会などの公演についても告知や取材を積極的に新聞掲載し盛り立てており、社内評価としては、伝統芸能の正しい継承と新しい世代の育成に向き合い、受験生の拡がりと新人賞からグランプリまで一貫とした育成に取り組んでいる。

「沖縄芸能協会」とは、沖縄の伝統芸能の保存・継承と創作活動を推進し、組織的な芸能活動の展開を目標に、流会派を超えて約 30 の団体が加入する組織である。選考会の協賛団体でもあり、タイムス社内に事務局を置く。三線や太鼓、琉舞など全 6 部門の審査員は、同協会に所属する実演家たちが努めている。なかには 30 年近く選考会に携わってきた実演家もあり、選考会の重みや意義、知識は同協会にも蓄積されている。選考会における同協会とタイムス社の関係はまさに「車の両輪」であり、強い協力関係で結ばれている。<sup>18</sup>

#### 4-4. 琉球新報社「琉球古典芸能コンクール・芸能祭」

「琉球古典芸能コンクール・芸能祭」(以下、コンクール)は、琉球新報社(以下、新報社)主催の文化事業である。

琉球新報は 1893 年、沖縄県初の新聞であり、隔日刊新聞として発行された。その後、「ウルマ新報」「うるま新報」と呼ばれる時代を経て、1951 年、再び「琉球新報」の名で発行が開始された。同紙には「芸能」の紙面があり、日常的に芸能についての掲載がある。

主 催:株式会社琉球新報社

所在地:〒900-8525 沖縄県那覇市泉崎 1-10-3

開始年:1966 年

選考会応募者数:720 人(2019 年度)

趣旨:公正厳格な審査によって卓越した新進芸能家を見いだし、琉球古典芸能界への登竜を促して、琉球古典芸能の正しい継承と芸能文化の発展に寄与することを目的とする。

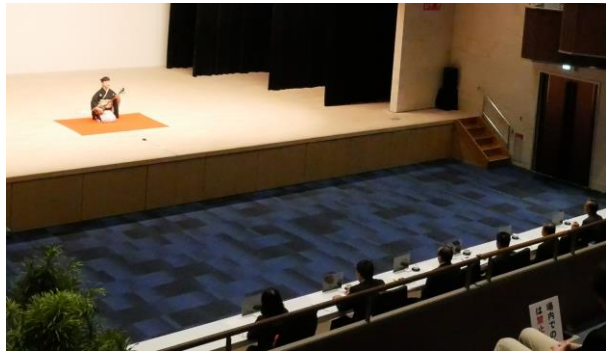
##### 4-4-1. 事業の概要と経緯

コンクールは、新報社の自社ビルの新報ホールが完成した 1966 年に開始された。タイムス社の芸術祭が一時中断した時期に、「いまのままだと祖先が残してくれた貴重な沖縄の芸能文化が減じるのではないか」との危機感が漂い、文化人や芸能関係者から「琉球古典芸能をさらに発展させるために新報社が積極的に取り組み、支援してほしい」との強い要請があり、そ

<sup>18</sup> 沖縄タイムス社 豊島氏インタビュー

れを受け入れる形で始まった。<sup>19</sup>

コンクールは、開始当初から部門の設定などが現在に至るまで一貫しており、部門は古典舞踊と古典音楽(三線・箏曲・太鼓・笛・胡弓)である。事業の目的は、琉球古典芸能の普及と型の確立であり、特に、流派を超えた型の統一が追求され、流派による違いについて、個性として豊かさを見出しながらも、「琉球古典芸能」としての軸となる型を確立させ、格式あるものにしていくということが繰り返し課題として上がってきた。



第 54 回琉球古典芸能コンクールの様子  
琉球新報社提供

第 1 回は、琉球文化連盟、沖縄テレビ、ラジオ沖縄が後援、琉球古典音楽連盟、琉球芸能研究所連盟の協賛で、5 日間の日程で開催された。「広く全琉と海外から新人の参加をもとめ、琉球古典芸能の新しい継承と普及奨励をはかる一方、公正な審査によって卓越した新進芸能家を発見、琉球古典芸能界への登場を促し、郷土芸能文化の向上に寄与する」ことがねらいとされた。

第 2 回は、沖縄テレビ、ラジオ沖縄、琉球文化連盟後援、沖縄芸能連盟協賛で開催され、入賞者には賞状と共に金賞(最高部門)、銀賞(優秀部門)、銅賞(新人部門)が贈られ、受賞を披露する芸能祭が後日開催された。協賛団体となっている「沖縄芸能連盟」は、1967 年に芸能人の親睦と相互扶助を目的に結成された団体で、事務局を新報社内には置くコンクールの運営パートナーである。

すでにこの頃には、第 1 回を経て 100 人以上の新進芸能家が芸能界へ進出しており、コンクールは、沖縄における伝統芸能界への登竜門とされた。参加者の年齢層は、10 代から 70 代、職業も幅広く、公務員、会社員、教師、学生、医師、美容師、農業、工業、商業、主婦などであり、いかに伝統芸能の実演家の裾野が広がっているかわかる。

第 15 回の頃には、参加者多数のため約 40 日間にわたって開催された。コンクール開始から 15 年が経過し、琉球古典芸能の継承普及で多くの成果をあげてきたが、同時に質の面での指摘も出された。

第 30 回の頃には、コンクールが普及に大きく貢献したため、沖縄の伝統芸能界がコンクールを中心に動いている点や、型の追求による形骸化について指摘されている。第 32 回には参加者が 2,010 人とピークを迎え、一つの会場に収まらなかったため、2 会場に分け朝から晩まで審査を行った。<sup>20</sup>

第 1 回から第 54 回までの 54 年間で、延べ 63,048 人が受験し、述べ 32,631 人が合格して

<sup>19</sup> 琉球新報社(1996)p.23

<sup>20</sup> 琉球新報社 仲原氏・内間氏インタビュー

おり、実力を厳しく試されるコンクールとして知られ沖縄の伝統芸能界に根付いている。<sup>21</sup>コンクールを経験した多くの芸能家が県内外、海外の舞台で活躍し、組踊・琉球古典音楽・琉球舞踊の重要無形文化財保持者、人間国宝として活躍してきたことから、次世代を担う新進芸能家を数多く育成し、輩出する“拠点”ともなっている。

審査員については、県内外の琉球舞踊、古典音楽の師匠クラスから、実演家・指導者としての実績と経験を踏まえ、琉球新報社が委嘱した約 120 人が務めている。第 40 回(2005 年)から 75 歳の定年制度を導入し、担い手育成に貢献している若手審査員の登用につなげている。隔年で数十人が入れ替わることで、伝統の継承と発展に寄与するコンクールの意義を次世代につなぎ、若手実演家の育成・支援を行う環境づくりにもつなげている。<sup>22</sup>

近年では、関連事業として 2019 年に第 9 回を数える「八重山古典芸能コンクール・芸能祭」を開催し、各地域の芸能の振興にも取り組んでいる。

#### 4-4-2. 事業の運営

コンクールについては参加費、芸能祭はチケット収入でほとんどを成立させている。参加者数の確保については、長年自社の新聞で PR を続けてきている。また、同社にはコンクール以外にも伝統芸能事業が開催されており、小学生から琉球舞踊の披露ができる「こども舞踊大会」(2019 年で第 55 回となる)や、次世代育成を図る「若衆芸術祭」(琉球新報社・沖縄芸能連盟主催。2020 年 2 月で第 4 回)がある。子ども時代から参加できるこれらの事業があることで、将来的なコンクールへの参加者数の確保につながっている。

社内での事業評価としては、社会的貢献の大きさが重視されており、各流派会ではなく、第三者である新聞社が運営することによって公平性や審査の厳格さが保たれ、伝統文化の保全に貢献しているという点が評価につながっているという。

事業の方針や運営については、より専門的な知識を要するため社内に事務局を置く沖縄芸能連盟と連携しながら進めている。新報社の事業担当者が異動した際も、同連盟に 30 年以上に渡って携わる実演家でもある事務局員(新報社の嘱託職員)から助言が得られるということで、そこにも知識・ノウハウが蓄積されている。<sup>23</sup>

### 5. 考察

以上、タイムス社の選考会と新報社のコンクールについて調査してきた結果、事業継続の要因として、次の 3 点が見えてきた。

---

<sup>21</sup> 琉球新報社「第 54 回琉球古典芸能祭」パンフレット p.123

<sup>22</sup> 琉球新報社 仲原氏インタビュー

<sup>23</sup> 琉球新報社 内間氏インタビュー

## 5-1. 継続の要因

### ①共感を得る事業目的

2社の取り組みは、具体的には沖縄の伝統芸能を対象に、主に実演家の技芸の向上に力を注いできた。しかしその根底には、地域の文化によって地域の人々の矜持を高めるという事業の目的があった。

背景には「沖縄らしさ」の喪失の危機に直面するという特殊な事情があり、特に両社が事業を始めた当初、沖縄はアメリカ統治下にあったため、その中で沖縄独自の文化を重点的に振興することは、沖縄の独自性を主張することと直結していた。この2社の姿勢が当時の沖縄の人々の共感を呼び、継続した盛り上がりにつながったと考えられる。

数ある文化・芸術の中から、なぜその対象を選び、何を実現しようとしているのかについて共感が得られたことが事業の求心力の継続につながったと考えられる。

### ②ステークホルダーとのパートナーシップの構築

2社は選考会・コンクールを、ステークホルダーとの強いパートナーシップによって運営してきた。選考会・コンクールにおいて重要なステークホルダーは、参加者や審査員等が所属している各流派が加入する芸能協会・連盟である。

参加者については、子どもの頃から出演できる伝統芸能の発表会といった関連事業を設け連動させることにより、生涯に渡って「芸道」の修業が続けられる環境をつくっている。そして、受賞者については、その後の受賞や独演会の開催などについて新聞記事として掲載することで、一度きりの受賞では終わらない関係性を築いている。このように子どもから大人、初心者から受賞者まで、各段階に応じた関わり方を提供することで、参加者が長く事業に関わる仕組みづくりをしている。

また、芸能協会・連盟については、2社とも社内に事務局を置き、事業運営において強い協力関係を築いている。社内や少数の意思決定で事業の方針が決定する場合、トップダウンで内容が左右されやすくなるが、目標を共にするパートナーと事業を運営することで、方針が守られやすくなっている。

このように幅広い層との接点をつくりだすことで地域的な事業となり、地域社会に貢献する文化振興事業として事業価値も向上している。

### ③長期的に携わる専門家・担当者の存在

パートナーである芸能協会・連盟の中には、約30年といった長期に渡って審査や運営に携わる専門家や担当者がおり、事業の詳細な部分について保持している。社内の事業担当者が新しく異動してきた際などは、社内での十分な引き継ぎに加えて、その担当者に助言を得ることもあるという。複数の人と信頼関係を築きながら共に取り組むことが事業の継続につながっている。



## 5-2. 課題

2 社の事業とも沖縄の伝統芸能を初期から支え発展させてきたが、近年は参加者数が減少傾向にあるという。原因は少子高齢化や習い事・趣味の多様化とされているが、2 社の事業に限らず、若者の琉球舞踊や古典音楽離れの状況がある<sup>24</sup>。

そこで、沖縄県外で沖縄の伝統芸能事業に取り組み、高い評価を得て、集客力にも定評のある、横浜能楽堂の取り組みについて調査することにした。

## 6. 課題解決に向けた調査

### 6-1. 横浜能楽堂「琉球芸能事業」

横浜能楽堂は、東京から 1 時間弱の場所にある横浜市立の公共施設で、「敷居の低い能楽堂」をキャッチフレーズとし、高い企画力と制作力・集客力が特徴である。

2004 年には、日本で唯一の能楽研究所をもつ法政大学が授与する能楽界で最も権威のあるといわれる催花賞を「新時代における能楽堂の在り方を示した」として受賞した。また、2006 年には、先駆的な公立文化施設に贈られる「JAFRA アワード」(総務大臣賞)、2009 年には、「武家の狂言 町衆の狂言」の企画・制作で文化庁芸術祭優秀賞を受賞している。そして、2015 年には、企画公演「琉球舞踊 古典女七踊」の企画・制作に対して、「“伝統の再創造”という観点からも上演の意義は極めて大きい」と評価され、文化庁芸術祭大賞を受賞している。

一般的に能楽では演者が曲や共演者・奏者を決め、自前の能楽堂で演じることが当たり前とされてきたが、芸術監督の中村雅之氏を中心に、これまでにはなかった「伝統芸能のプロデュース」という発想で事業を展開している。



横浜能楽堂外観

<https://yokohama-nohgakudou.org/>



横浜能楽堂 能舞台

<https://yokohama-nohgakudou.org/about/seal/>

<sup>24</sup> 琉球新報社編(2017)p.29 2001 年の調査では、20 代の支持率は舞踊 47.9%、古典音楽 13.2%だったが、2016 年の調査では、舞踊 18.5%、古典音楽 8.1%に落ち込んでいる。

所在地:〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘 27-2

施設:本舞台(486席)、第二舞台(約60人収容)、研修室(4室)、楽屋(4室)

本舞台は1875年、東京・根岸に建てられ、後に東京・染井に移築され、1965年まで利用されてきたもの。関東地方現存最古の舞台で、公演として使われている舞台としては全国で一番古い。

運営:公益財団法人横浜市芸術文化振興財団(単独指名による指定管理者)

開館:1996年

来館者数:50,028人(2019年度)

プロデューサー:2名、企画制作担当2名

特徴:高い企画・制作力によって知られる、日本の古典芸能のアーツセンター。能を始めとする日本の古典芸能の上演だけに止まらず、海外とのコラボレーションにより新たな作品も生み出しており、「多角的な視点から能・狂言を問い直す」「伝統を軸とした幅広い国際交流」「多様なニーズに応え「敷居を低く」「古典芸能を土台に新たな伝統を創造」の4つのコンセプトを掲げている。

琉球芸能事業:1998年から沖縄の古典芸能公演を毎年制作。開館15周年の2012年に能楽と琉球芸能の2本柱を軸にすることを宣言し、毎年制作・公演をしている。

ウェブサイト:<http://ynt.yafjp.org/>

横浜能楽堂の基本方針の中で、果たす役割について次のように示している。

#### 横浜能楽堂の果たす役割

古典芸能の専門施設として「文化芸術による魅力・活力の創出」の一翼を担い、「古典芸能の総合的な受発信基地」としての役割を果たします。

質の高い普及公演・講座・ワークショップの開催や、専門施設ならではの高い芸術性・学術性を基盤とした企画公演や発信性の高い国際交流事業の実施を通じて、能楽に関心のない層にも訴えかけて能楽振興につなげるほか、次代を担う子どもたちを対象とする事業を強化していくことにより古典芸能愛好者の裾野を広げます。<sup>25</sup>

#### 6-1-1. 事業の経緯と概要

横浜能楽堂で沖縄の伝統芸能事業を始めたのは、横浜に多くの沖縄出身者が暮らしていることに着目したからであり、日本の伝統芸能を広げるにあたり、琉球芸能をその一つの軸と位置付けている。1998年から沖縄の古典芸能公演を毎年制作しており、2012年の開館15周年

<sup>25</sup> 平成30年度業務計画書及び収支予算



の際には、他の能楽堂にはない横浜らしさを打ち出すために、これからは「能楽(能・狂言)と琉球芸能」という2本柱を軸にすること宣言した。その年の周年事業では江戸城と首里城で行われた芸能公演の再現を行った。他にも下の事業名からもわかるように、毎公演ごとに踊りの比較や能との関連性、衣装への注目や時代性のある演目などテーマを持たせ、鑑賞者の興味を惹くものになっている。



#### ■横浜能楽堂の琉球伝統芸能事業

- 2012年4月30日「琉球芸能 本土に咲く華々」
- 2013年11月9日「琉球舞踊 受け継がれる伝統-古典・雑踊・創作」
- 2014年11月1日「琉球舞踊 古典女七踊」
- 2015年1月17日「能の五番 朝薫の五番」組踊「女物狂」
- 2015年10月31日「琉球の美 技と技-『人間国宝』の衣装で『人間国宝』が踊る」
- 2016年1月16日「能の五番 朝薫の五番」組踊「銘苅子」
- 2017年2月4日「能の五番 朝薫の五番」組踊「孝行の巻」
- 2018年2月4日「能の五番 朝薫の五番」組踊「二童敵討」
- 2019年2月9日「能の五番 朝薫の五番」組踊「執心鐘入」
- 2019年6月2日「大典 奉祝の芸能」第1日

#### 6-1-2. 事業の運営

琉球芸能事業のプロデュースは主に中村氏が担当しており、他に1~2人の制作担当を付ける。「沖縄は実演家の層が厚いが、それをどう生かすかが今後の課題。そのお手伝いをした

い」<sup>26</sup>と考え取り組んでいる。また「事業は哲学」と考えており、その哲学が引き継がれなければ形骸化することになり続かないという。本事業の人気の理由については、沖縄での公演に引けを取らないような顔ぶれを揃えていること、そして企画内容が沖縄でも見られないような斬新なものであるからと分析する。また、公演プロデューサーとして必要なことは「観客視点と社会性」を備え、趣味の延長ではなく仕事として全うする姿勢であると考えている。中村氏自身、沖縄出身者でないため、沖縄芸能の魅力を客観的に見ることができ、また、解説書や演出・脚本の執筆はあるが、演じ手・奏者の経験はなく、そのことが客観性を保持しやすい理由の一つでもあるようだ。<sup>27</sup>

## 6-2. 考察 評価と人気の理由

以上から、横浜能楽堂のプロデュース公演が高く評価されながら、人気を集める理由をまとめると次のとおりである。

まず、演じ手が演じたいものを公演するのではなく、客観的な目線をもつプロデューサーを通すことで、伝統芸能の魅力をわかりやすく引き出している。そして、新しい試みを加えることで伝統芸能を再創造し、他では観られない公演を提供している。

これらを実現するため、プロデューサーには、暗黙知が多い伝統芸能をわかりやすく伝える解説者としての役割や、新しい着眼点での発想力、優れた演じ手を揃える人脈や交渉力が求められる。

## 7. 本調査から得られた結論

本レポートでは、文化・芸術の振興には長期的な視点が必要であるという考えに立ち、企業メセナの中から、沖縄の伝統芸能の振興を行う 2 社の事業について取り上げ、取り組みが継続する要因をさぐった。その結果、地域社会の課題の中からメセナの対象・目的を見出すことで地域社会から共感を得て、専門の団体とパートナーシップを組み、運営面では専門家や担当者を長期的に配置することによって、取り組みが根付いてきたことがわかった。

また、近年の選考会・コンクール参加者数の減少という課題について、横浜能楽堂が行なうプロデュース公演に解決策を求めたところ、評価・人気の理由が鑑賞者の目線に立つことや他ではみられない伝統芸能の再創造にあることがわかった。

これまで沖縄の伝統芸能は、演じ手の技芸の向上を中心に発展してきたが、今後は、魅力をわかりやすく表現する方法や、継承と再創造の融合に取り組むといった未開拓だった部分に取り組むことで、新たな展開が期待でき、それに伴い演じ手を目指す人の増加も図れるのではないだろうか。

沖縄の伝統芸能の振興の中心はタイムス社と新報社であり、両社が企業メセナとして先駆け

<sup>26</sup> 琉球新報 2014 年 12 月 26 日 <https://ryukyushimpo.jp/news/preentry-236483.html>

<sup>27</sup> 横浜能楽堂 中村氏インタビュー

て取り組んできたからこそ、地域のアイデンティティの一つとして認識されるまでに至った。地域アイデンティティである沖縄の伝統芸能が持つ課題について、今後は公的セクターを含む地域全体の課題として、長く広い視点で取り組んでいく必要があるだろう。

本レポート執筆中に、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が起こり、日本でも緊急事態宣言が発令された。あらゆる経済活動が停滞し、文化・芸術に関する分野は回復のめどが立っていない。タイムス社の選考会は今年度の開催中止を決定し、新報社は延期を発表した。

コロナ禍により文化・芸術の意義が問い直されるような時だからこそ、長期的で広い視野に立った文化・芸術振興が求められている。

#### ＜参考文献＞

- ・日本 ABC 協会 (2020)「新聞レポート 半期 2019 年 7～12 月」
- ・沖縄タイムス社編 (2018)「未来へつなぐ 沖縄タイムス社 70 年史」沖縄タイムス社
- ・琉球新報社編 (2017)「2016 沖縄県民意識調査報告書」琉球新報社
- ・中村雅之 (2009)「英訳付 一冊でわかる日本の古典芸能」淡交社
- ・渡邊洋子 (2008)「沖縄における「伝統芸能」と生涯学習・社会教育」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』(7) pp.63-81 京都大学大学院教育学研究科生涯教育学講座
- ・琉球新報社事業局編 (1996)「伝統の継承 琉球古典芸能コンクール三十年」琉球新報社
- ・芸術祭運営委員会編 (1963)「芸能祭 総覧 1954-1963」沖縄タイムス社

以上